2022
Annual
Report
年次報告書

Voice of Friends

FRIENDS
WITHOUT A BORDER

(認定)特定非営利活動法人
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
〒101-0031 東京都千代田区東神田1−14−11 ヤマダビル6F
TEL/FAX:03-6661-7558 friends@fwab.jp www.fwab.jp

Photo credit / Adri Berger , Yumiko Izu , Ellen Wallop

”国境なき友人たち“

支援者の皆さまへ

今年は思いがけずコロナ・パンデミックが3年目を迎えた年でした。

私たちのラオ・フレンズ小児病院の運営のみならず、ラオスの様々なビジネスも痛手を受けているようで、扉を閉めているホテルやレストランも数多く見受けられました。

でもこの国の子どもたちの健康を守るラオ・フレンズ小児病院は休んでいるわけにはいきません。

この間も院内では新生児室の改善、重症病棟と授乳のための部屋が新設されました。

どれも開院以来7年間の運営を通じて必要性を痛感したプロジェクトです。

これらの経費を捻出するためのクラウド・ファンディング等においての皆様のご支援に深く感謝いたします。

幸い、10月からはラオスへ入国規制が緩和され、数は少ないですが定期便が就航し始め、また入国時の隔離期間も2週間から1週間に短縮されて病院スタッフやボランティアなど外国からの人の流れも戻りつつあります。コロナ以前に活況を帯びたルアンパバーン・チャリティーハーフマラソンや、ルアンパバーン・ガラなど病院運営基金収集のためのイベントも少しずつ再開し始めました。

まだコロナ以前のような大きな対面イベントを開催できる状況ではありませんが、闇の彼方に夜明けが見えてきたような嬉しい気持ちです。

日本では以前から東京チャリティ・ガラディナーを秋に行ってきましたが、今年はレストランを貸し切って小さな規模で行いました。約80名の参加者皆様と無事を喜び合い、ラオ・フレンズ小児病院の現状報告をして、力を合わせて病院運営の確認ができたことは、顔を見て、手を取りあいならではの喜びでした。

私たちのモットー、Compassionate care”思いやりあるケア“の基本は互いの目を見つめ合う信頼関係から始まり相手の立場や気持ちを思いやるものです。それは対面で、より深まる関係だと思います。

私たちフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーは小さな非営利団体ですが、大きな団体では見過ごしがちな心の絆を大切に、将来のラオ・フレンズ小児病院の現地化を目指して運営を続けて行きたいと思います。

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー
創設者 井津建郎

世界中を翻弄させたコロナ感染拡大も落ち着きが見られるようになりました。試行錯誤の大変な3年間を乗り越えたことが、スタッフと病院の成長につながり、新たなステップを感じた1年でした。

院内のマネージメントに関わるチームは、各部署の部長やマネージャーで構成されています。コロナ以前はメンバーはほとんど外国人でしたが、今では半分がラオス人スタッフです。

2022年はラオス人初の部長が看護部で誕生し、自立へ大きく一歩近づきました。ミーティングの中でもラオス人から活発な意見が出るようになってきており、頼もしさを感じます。

このような病院運営に関わる人材育成に併せ、フレンズがミッションとして掲げている“Compassionate care(心のこもった質の高い医療)”を浸透させるためのワークショップも開催しました。

15~20名の多業種混合グループを作り、全スタッフを対象に2か月かけて丁寧に行いました。この機会は、個々のスタッフが自ら“感じる”、そして“考える”場となり、部署を超えたチーム力強化にもつながったと思っています。

院内の運営と人材基盤を固めることは病院としての評価を高め、来院患者数の急増につながりました。しかし、慢性的に許容範囲を超え、廊下にもベッドを配置して対応する状況では、質の高い医療を維持することが困難となります。ラオスには村と郡にそれぞれヘルスセンター、郡病院がありますが、そうした最寄りの医療施設を飛び越えてラオ・フレンズ小児病院を受診することは、国全体の医療の底上げを考えた時に理想的とは言えません。また、限られた財源では、増え続ける患者さんを受け入れることも難しくなるでしょう。

そこで、地方の郡病院への教育プロジェクトを開始しました。ラオ・フレンズ小児病院と同じ医療が地方でも受けられることを目的とし、教育を担います。

病院の成長が、ラオス全体の医療改善にも少しずつつながりを見せるようになってきました。日々いろいろな障壁にぶつかりながらですが、確実に前進していることを皆様へご報告できることをとても嬉しく思います。

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN
代表 赤尾和美

私たちは「医療」「教育」「予防」を活動の柱としています

国際基準に見合った、質の高い病院を

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPANは団体創設以来、医療を受けることが困難なアジアの子どもたちのために活動しています。ラオスとカンボジアに非営利の小児病院を設立し、24時間態勢で診療を実施。私たちの目指す小児病院は、「国際基準に見合った、質の高い、心のこもった医療を提供できる病院」です。

病院の外にも目を向ける、生活環境から考える医療

私たちの活動は病院内にとどまりません。経過観察が必要な慢性疾病患者をフォローアップする訪問看護や、保健・衛生観念が浸透していない農村部に出向いて病気の予防活動も行います。遠方の地域に赴くことで見えてくるもの、医療の必要性に気づいていない人に教育することで防げることがあるからです。

病院の現地化に向けて、私たちができること

私たちの目標は「現地の人の手で運営できる病院」です。いつまでも支援されるのではなく、自分たちで歩んでいける病院へ。そのためのスタッフ教育も、重要な取り組みの一つです。たとえば、病院の公用語を英語にすることで、世界中の指導者や書物から高度な技術を直接学んだり、自らが学会に参加したり、発信者となって世界に支援を呼びかけたりできるようにしています。アンコール小児病院（AHC）はすでに現地化を達成しました。ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）もまた、現地化を視野に入れながら、経験豊富な外国人スタッフやボランティアが日々、現地スタッフの育成に力を注いでいます。

ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）

2015年2月、ルアンパバーン県立病院敷地内に設立しました。現在、最も力を入れているのが、このプロジェクトです。ラオスでは肺炎や下痢、栄養失調等、予防や治療のできる病気で亡くなるケースが珍しくありません。子どもの病気がわかっても、貧しさゆえに治療しない選択をする親もいます。国の脆弱なインフラと山岳地形も、医療へのアクセスの妨げに。また、既存の病院や保健センターは、医療設備の不足や、医療従事者の医療倫理と技術の不足などにより、十分な医療を提供できるとは言えません。ラオスが抱える「使われない医療」「使えない医療」という実情を、少しでも改善したいと願っています。

アンコール小児病院（AHC）

1999年2月、私たちの最初のプロジェクトとして、シェムリアップに設立しました。当初は私たちが運営を担っていましたが、目標を達成し、2013年1月に現地化。現在は「カンボジア人の、カンボジア人による、カンボジア人のための病院」として、私たちが育てたスタッフが主体となって舵取りを行っています。また、カンボジア国内の小児医療をリードする存在に成長し、国の医療行政に関わるほか、国内他病院の医療従事者、医療系学生や保健衛生に携わる人たちにも研修を提供。国全体の医療レベル向上に貢献しています。予防活動も、農村部や小学校に出向いての衛生教育を継続中です。

医療

長引くコロナの影響は年が明けても続き、5月頃までは患者さんだけでなくスタッフにもコロナ感染者が多かったため、スタッフ配置を含めた受け入れ態勢の調整も大きな課題となりました。コロナの状況が落ち着いたのは後半になってからです。国内のコロナ規制が次第に弱まり、人々の心持ちにも変化が現れ始めた8月には、病院の患者数が過去最高を記録しました。続く9月も、8月とほぼ同数の患者さんが来院しています。11月からは、ルアンパバーン県立病院の指針に従い、入院患者さんのコロナ検査が廃止に。これを機にようやく、平常時に近い病院の姿を取り戻せたと言えましょう。

一方で、患者さんの増加は、入院病棟に混乱を生じさせてしまいました。6月から9月の4か月間、ベッド24床に対し、45人の患者さんを受け入れることになってしまったのです。病棟外の廊下に簡易ベッドを置くなどして緊急対応しましたが、満足なケアを行えたかというと疑問が残り、今後の対応を検討するきっかけとなりました。まずは、来年以降はこうした状況を繰り返さないこと。病院の規模は拡大できないため、院内での対応が難しい場合は、県内の郡立病院と連携を取ることを確認し合いました。

外来病棟では、ネフローゼ症候群、てんかん、脳感染症、出産時合併症、整形外科的外傷後フォローアップなど、特定の診断に特化したクリニック設立に向けて動き始めました。これらの慢性疾患やフォローアップのための診療は、一般の外来では優先度が低くなりがちです。

また、経験豊富な医師の診断が必要な複雑な疾患も少なくありません。このプロジェクトは、そうした状況を改善しようとするものであり、医師の教育にも役立ちます。サラセミアクリニックなどと同様に、特定の日を設けて開設する方針です。

特別なニュースは、重症病棟（HAU＝High Acuity Unit）がオープンしたこと。年始から建物の拡張工事を始め、ベッド4床、看護ステーション、トイレを備えた病棟が、7月にプレオープン、10月28日に正式オープンとなりました。重症病棟（HAU）は、一般病棟と集中治療室（ICU＝Intensive Care Unit）の中間に位置するもので、重症度の高い患者さんのケアや体調管理にきめ細かく対応することが可能です。ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）内では、最も重症な患者さんを受け入れる病棟となります。

開設に向けては様々な準備が必要でした。首都ビエンチャンにある病院の視察や保健省ならびに保健科学大学とミーティングを行い、小児集中治療に関する国のガイドラインを作成。研修のため、時期をずらしながら4人グループを2回に分け計8人の看護師をビエンチャンへ派遣。医師や看護師の日勤・夜勤の人員配置。加えて、重症度の高い患者さんを受け持つことの技術面・精神面をサポートする態勢を整えることも行っています。また、ハード面では、小児用の人工呼吸器を2台設置しました。

重症病棟（HAU）では患者さんの危険な徴候をより早く察知でき、早急な処置を施すことができます。国や、ICUを持つ他病院からの期待度も高く、今後は様々な形で連携が取られることになりそうです。

医療

新生児病棟

早産児や低体重児に対して行う「カンガルーケア」という医療行為があります。「カンガルーケア」とは、生後間もなくから赤ちゃんを直接胸に抱っこすること。皮膚接触によって赤ちゃんの体温を維持しながら呼吸を安定させ、母乳の分泌を促進させることが証明されています。新生児病棟では「カンガルーケア」を普及させるため、看護師たちが特製のTシャツをデザイン・制作。それに合わせて「カンガルーケア」の体位で光線治療ができる「ビリブランケット」も新しく購入しました。

また、ラオス保健省やラオス小児学会を通じて、「ドナーミルクバンク」に関する国のガイドラインを制作してほしいとの依頼を受けました。「ドナーミルクバンク」は世界各地に開設されていますが、ラオスではまだ機能していません。国内で大きな関心を集めている、というのが現況です。

「ドナーミルクバンク」とはその名の通り、寄付された母乳を保管・管理するもの。ユニセフや世界保健機構（WHO）では母乳を乳児にとっての完全食品と位置づけており、生後すぐから母乳栄養を与えることを推奨していますが、お母さんや赤ちゃんの健康状態によってはそれが困難な場合もあります。「ドナーミルクバンク」開設に向けて動き出すことは、早産児や新生児病棟での栄養問題解消を促す大きな一歩となるでしょう。

授乳室

2021年にREADYFORを通したクラウドファンディングで得た資金をもとに、病院を建て増しして授乳室が開設されました。

お母さんたちのプライバシーを守り、ゆったりとリラックスしながら安心して授乳できる場所。様々な理由で口からミルクを飲めない赤ちゃんのために搾乳できる場所。そうした場所の確保は、以前からの懸案でした。多くの方からのご支援で完成した授乳室は、お母さんたちに大好評です。そして、授乳室には別な大事な役割も。妊産婦検診や乳児検診がほとんど機能していないラオスでは、新米ママや家族に育児の情報を与える場がありません。新生児や乳幼児に必要な栄養の事、お母さんのからだの事など、覚えておいてほしい事を伝える教育の場として、授乳室が大いに活用されています。

郡立病院サポートプロジェクト

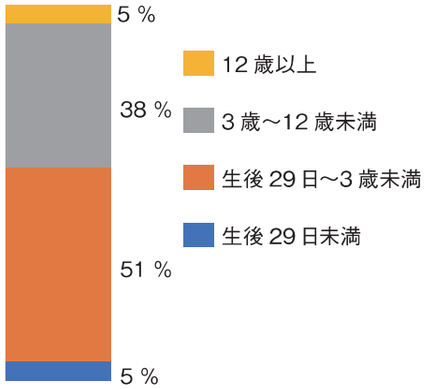
ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）の患者数が増加し、院内での対応が困難になった際には、必然的に近隣の郡立病院と連携を取り合わなくてはなりません。そのための紹介・搬送に関する準備はあるものの、他病院でLFHCと同等のケアを提供できるか、という点ではまだ不完全です。紹介・搬送された患者さんが、他病院であっても質の高いケアを受けられるよう、郡立病院へのサポートプロジェクトが立ち上がりました。コミュニティケアのための国のプログラム「IMNCI＝小児疾病総合管理」を用いて、郡立病院を包括的にサポートしていきます。このプロジェクトにはラオス保健局と県立病院の協力も得ており、話し合いの場を持ちながら進めていくこととなりました。

数字で見るラオ・フレンズ小児病院（LFHC）

子どもたちに人気の病院マスコット象のジャイディーが解説します。

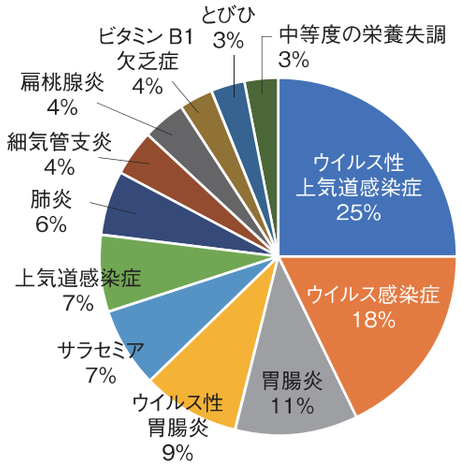
◎何歳位の子どもたちが来院するの？

3歳未満の子どもが半数以上を占めています。



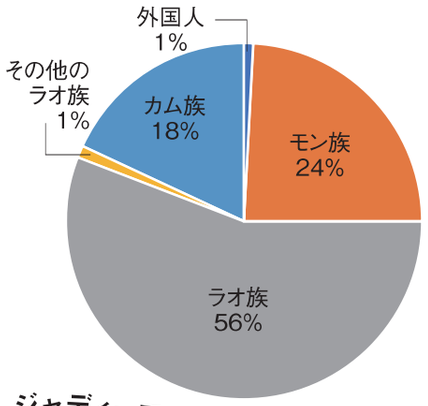
◎どんな病気が多いの？

約半数はウイルス性の疾患です。比較的割合の高いサラセミアは遺伝性の血液疾患で、日本では稀な病気とされています。



◎訪れる民族の割合は？

多民族国家のラオスでは患者さんの民族も様々。国内での割合は多い順からラオ族→カム族→モン族……となりますが、LFHCではモン族の割合が高いようです。

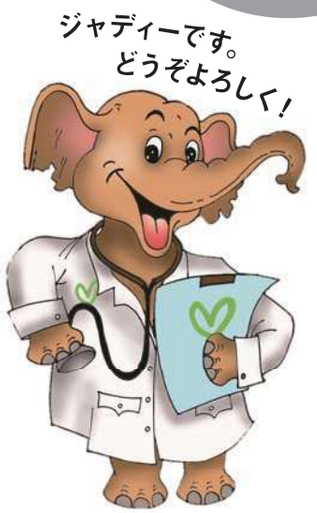


◎病院を訪れる患者さんは何人位いるの？

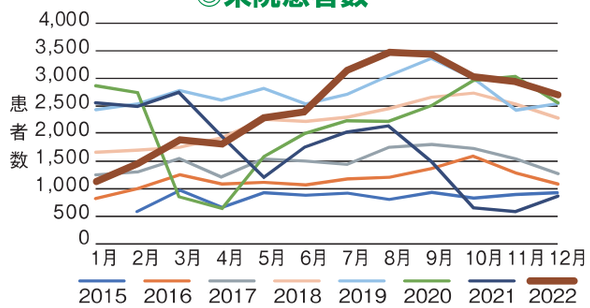
コロナの影響が弱まり、8月には過去最多の患者数を記録しました。

外来患者総数	：	17,911人
入院患者数	：	2,894人
新生児患者数	：	189人
救急患者数	：	13,433人
手術件数	：	980人

※のべ人数



◎来院患者数



教育

院内スタッフの教育と、ラオス国内の医療スキルを向上させるための研修は、ラオ・フレンズ小児病院（ＬＦＨＣ）が活動の柱としていることの一つです。今後の継続的な成長と世界水準を見据えたトレーニングの必要性を鑑み、院内に新たに「教育部」を設立しました。これにより、院内外の研修や国際カンファレンスへの参加サポートがより強固に。各部署との連携や要望に沿った教育の提供も行いやすくなります。ラオス保健省や保健科学大学からナショナルトレーニングへのサポート要請依頼もあり、今後は国との連携も強まりそうです。そして、院内教育は２０２２年に大変革がありました。ウェブベースの学習プラットフォーム「Moodle」の導入です。このプラットフォームにはすべての講義やプレゼンテーションが統合されている上、一度ダウンロードすればWi-Fiがない場所でも使用可能で、いつでも、どこでも、自分が学びたい項目を選んで学習することができます。国のカリキュラムや他の小児病院とプラットフォームが共有される計画も進められており、将来的にはより充実した教育ツールに成長していくはずです。英語教育は、全スタッフを初級から中上級まで５つのレベルに分け、各レベルに合わせた学習スタイルで授業が行われています。レッスンを欠席した場合でも各自で追いつけるプログラム設計や、医師がより定期的に受講できる業務体制なども見直されました。また、医師を対象としたメディカルコースも新設しています。

◉新人医師のための１年間の基礎コースカリキュラムを実施しました。

◉中級・上級医師向け３年コースのカリキュラム見直しを行いました。

◉医師の基礎コース後のフォローアップとして、２年コースのカリキュラムを計画中です。

◉看護師教育プログラムを継続し、短期コースも実施しました。

◉看護師教育プログラムの習熟度テストを実施し、60人中54人の看護師がテストに合格しました。

◉各部門で管理職に昇格した看護師は、パソコンのスキルアップサポートやトレーニングを受講しました。

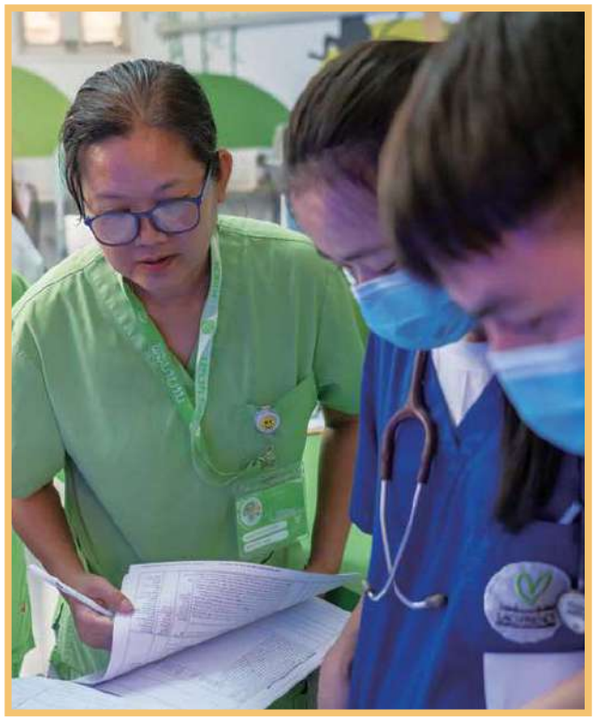
◉医師と看護師の合同トレーニングを実施しました。

◉医療スタッフと非医療スタッフの合同トレーニング（リーダーシップとマネージメント）を実施しました。

◉検査科スタッフが、タイの病院で３週間の研修に参加しました。

◉感染予防・管理チームのスタッフ４人が、カンボジアのアンコール小児病院（ＡＨＣ）で１週間の研修に参加しました。

◉手術室の看護マネージャーが、イギリス火傷学会が主催する３か月の研修にオンラインで参加しました。



◉栄養士が、タイ母乳育児協会が主催する３日間のオンラインセミナーに参加しました。

◉国内の看護学生40人、助産師学生48人、医療助手学生57人の研修を受け入れました。

◉ビエンチャンからの研修医12人を受け入れ、臨床ローテーションにも参加しました。

◉サヤブリ県立病院の医師２人、看護師２人を受け入れ、新生児医療について研修を行いました。

◉ルアンパバーン軍立病院の医師１人、看護師１人の研修を受け入れました。

◉アメリカのピッツバーグ大学から４人の麻酔専門看護学生を受け入れ、手術室での研修を行いました。彼らは、ＨＶＯ（ヘルス・ボランティア・オーバーシーズ）のボランティアとして定期的に教育のサポートをしてくれている、リック・ヘンカー氏の元にいる学生です。

予防

アウトリーチプログラムの主な活動は、院内にいる患者さんがスムーズに退院できるようサポートし、退院後も健やかに過ごせるようなフォローアップを行うことです。コロナ禍が落ち着いてアウトリーチの業務も通常に戻り、忙しい日々が復活しました。

主な業務のひとつである訪問看護で訪れた総数は508件。訪問した患者数はのべ421人で、総走行距離は3万4454キロ。2021年の2万1988キロと比較して1万キロも増え、地球1周まであともう1歩という距離でした。

訪問看護に関わる患者さんの多くはルアンパバーン郡外の遠方に住むモン族やカム族です。民族独特の文化を持って生活をしており、その習慣や慣習が健康に悪影響を及ぼしているケースも見受けられます。訪問看護では、地域、環境、家族、文化など全人的な視点から患者さんを評価し、ニーズを把握することに努めています。そして、全人的なアプローチは院内でも同様に、アウトリーチ・チームが主体となって対応しています。具体的には、薬や食事に関する健康教育、個々の家族の問題に関するカウンセリング、経済的支援のためのアセスメント、電話によるフォローアップ、患者さんの搬送など。業務は多岐に渡り、院内外で需要が高まっているため、新たに看護師1名を採用しました。

"Compassionate care"のかたまりのようなスタッフで、将来が期待されています。

そのほか、数年前から取り組んでいる「家族を含む緩和ケアと死後のケア」を改善するためのサポート方法について、考える時間を多く持ちました。緩和ケアというと悪性の疾患を思い浮かべがちですが、治療の方法がない患者さんや慢性的な苦痛がある患者さんなど、対象となる患者さんは様々です。ご家族への告知、心理的サポート、死後のご家族への訪問などについて、症例ごとにチームで話し合い、少しでも改善できるように日々、頭を悩ませています。この課題は、来年以降も引き続き追及していきたいと考えています。

健康教育	：718件
カウンセリング	：382件
経済状況アセスメント	：328件
訪問看護開始前のアセスメント	：92件
電話でのフォローアップ	：635回
患者さんの搬送	：58回

緩和ケアあれこれ

C君は筋ジストロフィーです。下肢から筋力が落ち始め、少しずつ上半身へも広がっていく進行性の疾患で、治療方法がなく、進行を遅らせるための投薬やリハビリテーションが主な処置に。そこで、緩和ケアのケアプランを立てました。まず、家族へのリハビリ指導と、姿勢を保つためのピローの提供。かろうじて動く両手先でスマホゲームができるようにし、楽しい時間が過ごせるように考えました。

そんなある日、お父さんから「C君はもう何年も家から出たことがない」と聞き、C君を楽しい場所へ連れ出してあげられないかと話し合いました。ちょうど病院では地元のプロサッカーチームによるチャリティフットボールを計画中だったのでC君を誘うと、C君のみならず家族全員が「観たい！」と大喜び。C君の家は病院から車で3時間。前日から迎えに行って院内に1泊し、試合を観に行くことができました。

沢山のことはできませんし、できることはとても限られていますが、少しでも楽しい時間を作るためにスタッフが悩むことが大事なのだと思います。

ラオス・フレンズ小児病院（LFHC）だより

コロナ禍で一時中断されていた発達・障がい児クリニックが再開されました

医療が身近にないラオスでは、病気であれケガであれ、からだに何か異変を感じても、すぐに病院へ行こうという行動には結びつきません。障がいがあった場合でも、病院に通ってリハビリを受けることは一般的ではないのです。そもそも、ラオスの医療機関の多くは、障がいの種類や程度を見極め、それ相応の対処をするスキルを持ち合わせていません。LFHCの発達・障がい児クリニックは、ラオス北部で唯一の専門外来です。患者さん一人一人と向き合い、患者さん家族も含めてサポートする態勢を整えています。コロナの感染拡大を受け、クリニックは一時的に閉鎖されていましたが、1月に再開され、いつも通りに患者さんを迎えることができるようになりました。

ラオス人スタッフ初のディレクターが誕生！新しい看護部長が決まりました

LFHCに勤務して7年のマリー・チッタパイ看護師が、看護部長に昇進しました。部長職＝ディレクターは、病院運営にも関わる重要なポジションです。これまでは海外スタッフのみで担われていましたので、ラオス人スタッフ初のディレクター誕生となりました。

日々の献身的な勤務態度や勉強熱心なところ、フレンズが掲げる「コンパッショネートケア」への深い理解が、このたびの昇進の決め手となったようです。マリーは「出身やお金がある かないかに関わらず、すべての子どもたちが無料で質の高い心のこもったケアを受ける権利があると信じています。ルアンパバーン県出身の一人として、LFHCが自分の生まれ育った地域の人々をサポートしていることに誇りと喜びを感じています」と語っています。

ラオスのプロサッカーチームルアンパバーンFCがLFHCを訪問

ラオスにもプロサッカーチームがあります。他国と違うのは、プロではあってもそれはシーズン中だけのことで、オフシーズンはチームが解体されてしまうことでしょうか。ラオス独自のユニークなチーム運営のされ方があるようです。

さて、そのプロサッカーチームの一つ、ルアンパバーンFCの皆さんが、たくさんのプレゼントを持って、LFHCの子どもたちに会いに来てくれました。入院病棟やサラセミアクリニックを選手が訪れると、子どもたちはみんな大喜び。試合で苦しい時、選手は応援で力を得ると言いますが、病気と戦う子どもたちも同じく、応援が力になるのです。そしてなんと、背番号29番は石川令さんという日本人選手！こうした偶然に、日本事務局も元気をもらったのでした。

ベテラン看護師のケオが忘れられない患者さんのエピソード

外来診療棟看護マネージャーとして勤務するケオは、25年の経験を持つベテラン看護師です。日本への留学経験もあり、以前、研修のため来日した際には、上手な日本語を披露してくれました。これは、そんなケオが、これまで出会った患者さんの中でも忘れられないというお話です。

ある日、新生児病棟から呼び出されたケオは、出産したばかりで母乳の出ないお母さんのお世話をすることになりました。生まれた赤ちゃんは、体重わずか1.3kg。これまで4人の赤ちゃんを出産していますが、いずれも大きく育つことができず、亡くなってしまったとのこと。お母さんは「この子もまた」という不安が大きく、赤ちゃんの健康状態をとても心配しては怖がり、毎日、泣いてばかりいます。ケオは、お母さんの気持ちに寄り添い、耳を傾けては気持ちを落ち着かせ、母乳マッサージを行いました。それでも悪い方へ悪い方へと考えてしまうお母さん。ついには自らの体調を崩し、出始めていた母乳の出も悪くなってしまいました。

ケオは、お母さんに接するうち、二人の間に何か特別な繋がりを感じるようになったのだそうです。そして、お母さんの不安を取り除くために新生児病棟を訪問し続けました。その気持ちが通じたのか、お母さんは体調を回復し、赤ちゃんも母乳を飲めるまで成長して、親子は2か月後に退院。再診時には、親子とも元気で、幸せにしている姿を見せてくれたそうです。

コンパッショネートケア＝質の高い心のこもったケアとは何か？それをいつも考え、実行し、後輩に伝えるケオは、看護部をリードしてくれるスタッフです。

重症病棟（HAU）がオープン さっそく患者さんを受け入れました

LFHC内に重症病棟（HAU＝High Acuity Unit）がオープンしました。集中治療室（ICU＝Intensive Care Unit）も重症患者さんを受け入れる病棟ですが、ICUまでは必要ないけれど一般病棟では対応が困難、といった患者さんを担当するのがHAUです。

HAU最初の患者さんとなったのが、ドゥアくん。他県から5時間以上かけて搬送されて来ました。到着時の彼の容態は深刻で、敗血症とチアミン欠乏症（ビタミンB1欠乏症）、肺炎を併発している状態。呼吸困難だったためCPAP装置（呼吸を助ける装置）を装着し、ビタミンB1注射や、経鼻胃チューブによるミルク投与などを行いました。もちろん、病棟チームの手厚いケアも必須です。数日後、劇的な回復力を発揮したドゥアくんは、無事に退院することができました。

ラオスを知ろう！

ユニセフ「世界子供白書2021」より抜粋	日本	ラオス	カンボジア
新生児死亡率	1人	22人	14人
5歳未満児死亡率	2人	46人	27人
妊産婦死亡率	5人	185人	160人
平均寿命	85歳	68歳	70歳
家庭で衛生的な飲用水源を利用している割合	99%	85%	71%
家庭で適切なトイレ設備を利用している割合	100%	79%	69%

※新生児および5歳未満児の死亡率は、出生数1,000人あたりの死亡数。
※妊産婦死亡率は、出生10万人あたりの死亡数で、
当該時期に妊娠関連の原因により死亡した事例が対象。

首都：ビエンチャン
面積：日本の約3分の2
地形：国土の約80%が山岳地帯で海のない内陸国
人口：埼玉県の人口と同程度
民族：ラオ族ほか50民族からなる多民族国家
気候：熱帯モンスーン気候（雨季5～10月、乾季11～4月）
政治体制：一党支配体制の社会主義国

乗り物編
～スタッフ・永野のラオス出張レポートより～

東南アジアでメジャーな乗り物と言えば「トゥクトゥク」と呼ばれる三輪タクシー。ラオスの街中でもよく目にします。乗車料金はドライバーさんとの交渉！ゲストハウスからLFHCまでの約4.5キロで約160円でした。

そして今、とても注目を集めているのが、開通間もない「ラオス中国鉄道」です。ルアンパバーンからビエンチャンに向かうのにはこれまで飛行機を利用していましたが、今回は、この新しい鉄道に乗ってみました。運賃は約1900円。ルアンパバーン駅は街の中心から車で20分ほどの郊外にあり、とても大きな駅舎が突然ドーンと現れます。構内の待合室には指定の時間まで入れないため、少し外で待ち、乗車時間の約2時間前に構内へと移動しました。さて、いよいよ乗車し、座席へ向かいます。私の座席10Cへ行くと……なぜかその席だけ向かい合わせ！どうやら、車両の真ん中で全体のシートの向きが変わるようです。私の席から後ろは全て進行方向向き。私の前から先は全て進行方向に背を向ける形。知らない人と向き合い、少し気まずい雰囲気での2時間は、面白い体験ではありました。とは言え、座席にはコンセントもありますし、車内販売もあってなかなか快適。夕方発で外が真っ暗だったため、車窓からの風景を楽しめなかったのが心残りです。

SUPPORT

カンボジア支援

【教育プロジェクト】

カンボジアは、2021年～2030年の10年間で達成を目指す保健戦略計画を掲げています。目標達成に向けて有能な医療者が求められており、そのためには充実した医療教育が欠かせません。こうした状況を受けて、カンボジアの小児医療分野で大きな責任を担うようになったアンコール小児病院（AHC）では、慢性疾患や非感染性疾患を学ぶ専門医の数を大幅に増やしました。また、神経学、腫瘍学、呼吸器学、内分泌学といった、国内でほとんど扱われていない分野に対してもカリキュラムを開発し、人材育成を進めています。これらのプログラムを終えた医師3人が、新たに専門医の認定を受けました。また、コロナによる渡航制限が緩和されたことで海外医療ボランティアが戻り、対面での研修が再開。オンラインでは難しかった技術指導も行われるようになりました。

■AHCスタッフへの教育

◉継続的な医療教育にのべ3049人が参加しました。
◉継続的な看護教育にのべ5054人が参加しました。
◉技術向上のためスタッフ36人がカンボジア全国会議に、13人が国際会議に参加しました。
◉医師13人が特別研修に、看護師14人が専門研修に参加しました。

■院外の医療従事者への教育

◉39人の医学生のインターンシップを終了しました。
◉208人の看護学生に研修を行いました。
◉他病院の医師と看護師31人に研修を行いました。
◉AHCが開講した「子どもの栄養講座」に国内各地から45人が参加しました。
◉臨床微生物学専門の医師が、保健省職員13人に有病率調査に関する研修を行いました。

【地域保健医療プロジェクト】

コロナの感染拡大は活動の大きな妨げとなりましたが、その一方で、衛生に対する人々の意識を高めることにつながりました。公衆衛生が重要なテーマとして見直され、多くの関心を集めることになったのです。農村部においては、スピーカーを用いた啓蒙活動を継続。オンラインを活用しての保健活動を行っていた小学校は11月から閉鎖が解かれたため、対面でのトレーニングも再開することができました。

外来患者総数	61,048人
入院患者数	3,417人
救急外来患者	15,051人
集中治療室患者数	1,447人
眼科患者数	12,271人
歯科患者数	8,415人

※のべ人数

◉のべ1647人の小学生に衛生教育を行いました。
◉38人の小学校教諭に、衛生設備、感染予防対策、薬剤耐性に関するトレーニングを提供しました。
◉2547人の子どもに栄養失調の検査を行いました。
◉1156人の子どもにテレビでの健康促進授業を行いました。
◉101人の教師に応急処置訓練を実施しました。
◉2615人の村人たちが調理デモンストレーションに参加しました。
◉94の村の保健援助グループに、医療や栄養に関する研修を行いました。

© Angkor Hospital for Children

フレンズJAPAN 事務局の 1年

少しずつ日常を取り戻しつつあるとはいえ、コロナ禍が去ったわけではなく、昨年同様、様々な制限の中での活動となりました。しかし、後半は対面でのイベントも復活し、2023年に向けて大きなステップが踏み出せたと思っています。

12月

クリスマスチャリティーコンサート2022
・女性デュオの花*花さんをメインアクトにお迎えしたコンサートを開催しました。

JAMMIN×フレンズ チャリティーコラボ商品 第2弾限定発売 歳末寄付キャンペーン開催

フレンズNight Run開催
・Run Buddy Make 代表の鳥光健仁さんを講師にお招きしたランニングイベントを開催しました。

11月

東京レガシーハーフマラソン2022
・一般財団法人東京マラソン財団が主催するハーフマラソン大会が開催されました。フレンズは東京マラソン財団チャリティ「RUN with HEART」の寄付先団体に選ばれており、本大会では8名の方がチャリティランナーとして走ってくださいました。

東京レガシーハーフマラソン2022の様子

10月

チャリティ・ディナー開催
・ユニオン スクエア トウキョウにて開催し、ライブオークションや寄付キャンペーンなどを通して、たくさんのご支援をいただきました。

9月

8月

フレンズトークvol.3【フレンズ活動報告会】をオンライン開催

7月

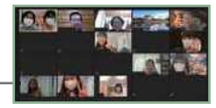
フレンズトークvol.2【“アジアの保健人材育成への関わり方に興味があるあなたへ”地域保健の現場から国の制度作りへ】をオンライン開催
・ラオスで看護師助産師国家資格創設に関わっている虎頭恭子さんをゲストにお迎えしました。

6月

夏期インターン生 山本優衣さんが活動に参加

5月

フレンズトークvol.1【“アジアの医療に興味があるあなたへ”あなたの「知りたい」がわかる!】をオンライン開催
・代表の赤尾と事務局の永野がアジアの医療についてトーク。クイズや質疑応答も行いました。



4月

母の日にハートを贈ろうキャンペーン開催

3月

2月

春期インターン生 寺﨑琳さんが活動に参加

1月

冬の募金キャンペーン開催

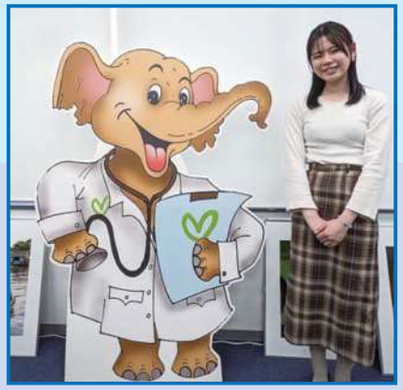
インターン通信

以前、学生インターンとして事務局業務に関わってくれた中島陽人さんと國分海さんが、活動を振り返ってくれました。

Q. フレンズでのインターンはどうでしたか?

中島：フレンズのインターンは自分にとって非常に貴重な経験となりました。海外へ目を向けるきっかけにもなり、今、スウェーデンに留学中です。インターンをしたことが留学にもつながっているのだなと、しみじみ感じています。今回は、インターンと留学を結びつけて振り返ってみたいと思います。インターンで得た力は留学でとても役に立っています。それは「予想外のことに対応する力」です。なんだか漠然としていて申し訳ないのですが、実際の社会活動は、学校の授業と違って正解がなく、自分でその都度考え、対応していかなくてはいけません。留学も同じで、異国の地で自分一人で飛行機に乗って旅をし、食材を調達し料理を作る、すべてが予想外の連続でした。

國分：私は今回、フレンズさんの元で広報のお仕事を手伝わせていただき、見えていない部分を人々に発信することの重要性を学びました。知られていない部分を明らかにする、そのキッカケ作りで、受け手の関心や興味を促すことができるのだということがよくわかりました。それがたとえ「寄付」という支援のかたちでなくても、知ってもらうという事は社会課題である医療問題を解決に導く一つの鍵となります。そうしたキッカケ作りを自分の手で作っている事にやりがいや素晴らしさを感じながら、仕事を全うできたと思います。



Q. 医療における文化の違いについて何か気がついたことはありますか?

中島：よく、海外に行くと視野が広がると聞きますが、これも漠然すぎてわからないですよね(笑)自分はこの意味を、他国の現状と日本を比較することができ、日本という国をより客観的に見ることができるようになるということだと勝手に思っています。医療についてもそうです。今、自分が生活しているスウェーデンの街には病院が全くなく、常に健康に気をつけて生活しています。日本はどうでしょうか、気軽に医療機関にアクセスでき、保険が適用されるため安い値段で治療することができます。フレンズが携わっているラオスにも医療における文化の違いが多々あることと思います。自分も将来、実際に訪れ確かめてみたいなと思っています。

國分：インターンシップを通し、ラオス・カンボジアでは病気を「予防する」という概念があまりないということがよくわかりました。要因としては病院数の少なさ、経済的な理由、体の異変を病気と捉えないことなど、様々な文化的背景が関係しています。中島さんの言う通り、日本では病院に足を運びやすいですし、コンビニでさえ薬を調達できます。しかしラオスではそうはいきません。だから患者さんたちに「病気にならないために予防が大事なんです」と説得しても、いきなり受け入れてもらうことはなかなか難しい。フレンズは地域に根付いている文化を無理に変えることなく、あくまでも「寄り添う」という形で訪問看護を行っています。それは、衛生観念の浸透だけでなく、精神面でのサポートの役割も担っているので、患者さんに対する思いやりの精神を強く感じました。

こんな支援方法もあります

◉本やCD/DVDを「ありがとうブック」に送付

家で眠っている本やCD、DVD、ゲームソフト、おもちゃ、小型家電等を合わせて30点以上、宅急便で「ありがとうブック」に送ると、その買取代金が当団体に寄付されます。新品・中古は問いません。部屋を片付けて寄付につなげましょう。

問い合わせ先：ありがとうブック

https://www.39book.jp/supporter/2095/

◉健康ドリンクを購入

「お～いお茶」などで知られる飲料水メーカー（株）伊藤園様とのタイアップ企画を行っています。

「伊藤園　健康体 契約企業専用サイト」

https://www.kenkotai.jp/shop/a/abbcT044/

このサイトでは優待価格で商品を購入でき、また、その売上の7%が当団体に寄付されます。「伊藤園 健康体」は、毎日の健康を積み重ねる良きパートナーとして、健康飲料や健康食品、サプリメントなどを扱っているオンラインショップです。健康増進を図ることが支援につながりますので、ぜひご利用ください。

◉イベントを開催

当団体を支援するチャリティイベントの企画・開催を歓迎します。たとえば、ご友人とのランチ会やゴルフコンペの会費に支援金を上乗せする、学園祭やサークルのイベントで募金箱を置く、自分たちでチャリティライブを行うなど。団体紹介の資料等が必要な場合は、お気軽にご相談ください。

◉ブランド品を「Brand Pledge」に送付

着なくなった洋服やブランド品をダンボールに詰めて「BRAND PLEDGE」に送ると、査定金額に500円を上乗せした金額がフレンズに寄付されます。

クローゼットの中に身に付けなくなったブランド品は眠っていませんか?もう出番はなさそうだけど捨てるには惜しい……と思ったらぜひ、そのブランド品を子どもたちへの支援にあててください。洋服やバッグ、アクセサリーだけでなく、スカーフ、ハンカチ、タオルなども対象となります。買取金額に対しては税制の優遇措置が可能な領収証を発行します。

◉グラフィックデザインなどの技能や専門知識を提供

チラシやDMのデザインを担当してくださるボランティアを募集しています。他にも、専門的な技能や知識を活かしたボランティアをしてみたい方、どんどんお声がけください。

◉携帯料金とまとめて寄付

ソフトバンクのスマートフォン利用者は「つながる募金」を通じ、携帯料金と一緒に寄付ができます。100円からの毎月継続寄付、1回限定の寄付を選択可能。ご寄付には税制の優遇措置が可能な領収証を発行します。

◉遺産・香典を寄付

故人の遺志を、アジアの子どもたちのために役立てていただくことができます。活動地やプロジェクトを指定することも可能。必要な手続きを行うと、税制の優遇措置を受けることができます。

皆さまの支援でこんなことができます

500円	医師や看護師用の使い捨て手術着1着分	5,000円	手術に使用する麻酔薬1回分
1,000円	粉ミルク2週間分	10,000円	1人の患者さんの入院費2日分
3,000円	首都ビエンチャンへの患者さんの往復交通費1人分	30,000円	院内薬局の運営費（薬代+人件費）1日分

※1ドル=120円の場合

How to Support

支援方法について

私たちの活動は、皆さまのご支援により支えられています。

支援方法をお選びいただけます

◉正会員

年会費　個人12,000円

団体・法人30,000円

（年度ごとに更新・議決権あり・入会申込書あり）

◉賛助会員

年会費6,000円（支払月より1年間）

◉学生賛助会員

年会費3,000円（支払月より1年間）

◉マンスリーサポーター

500円～自由に金額指定

（クレジットカードまたは指定口座より引き落とし）

◉一般寄付（金額・回数自由）

※ご寄付には税制の優遇措置が可能な領収証を発行します。

※銀行振込や、インターネットからのカード決済も可能です。

マンスリーサポーターって何?

マンスリーサポーターになると、決まった金額が毎月、ご指定の口座から自動的に引き落とされます。「継続的に支援したい」「小さな金額で無理なくコツコツと支援したい」「年会費の振り込みを忘れがち」といった支援者さんからの声にお応えして誕生しました。500円以上の金額を、ご自由に決めていただくことができます。

＜お申し込み方法＞

■クレジットカード決済をご希望の方

右のQRコードもしくは以下にアクセス

https://congrant.com/project/fwab/1658/form/step1

■口座振替をご希望の方

フレンズ事務局までお問い合わせください。

【寄付型飲料自販機】を広めよう！

自販機の売り上げの一部が寄付先団体に寄付される【寄付型飲料自販機】の設置を進めています。
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPANのオリジナル自販機に出会ったことはありませんか?その【寄付型飲料自販機】でドリンクを買うと、代金の一部が自動的に団体への寄付になります。これは（株）伊藤園様とコカ・コーラ ボトラーズジャパン（株）様が社会貢献活動として取り組んでくださっているもので、自販機利用者は気軽に支援ができますし、もしかしたら、知らず識らず支援していたというケースもあるかもしれません。
日本全国の様々な場所に私たちの【寄付型飲料自販機】が広がれば、寄付が集まるだけでなく、団体の活動を知ってくれる方も増えるはず。学校、職場、パーキングなどなど、【寄付型飲料自販機】を設置してくれる会社やお店を募集しています。
もちろん、個人で設置いただくことも可能です。
設置に関する詳細は、お気軽に事務局までお問い合わせください。

私たちがサポートしています
（株）伊藤園　営業スタッフの皆さま

どんな自販機にするか、フレンズ事務局のスタッフの方々と話し合ってデザインを決めました。ロゴマークや活動の写真を使ってラッピングし、団体らしさを失わないデザインになったと思っています。自販機設置後のアフターサポートもお任せください。商品補充や空き缶回収、売り上げ管理など、弊社が責任を持って担当します。設置してくださる方も、ドリンクを購入してくださる方も、誰もが気持ちよくご利用いただけるように気を配りますので、安心して設置をご検討ください。このような形でラオスの子どもたちを応援できることを、我々も嬉しく思っています。

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN 寄付型自販機設置場所一覧

泉佐野泉南医師会看護専門学校
宗教法人法瀧寺
宗教法人中山身語正宗　関東別院　誓照寺
SANパーク千代田神田平河町1
SANパーク武蔵野境南町3
SANパーク武蔵野西久保3
SANパーク草加栄町1
医療法人社団弘人会 中田病院
大野株式会社
（在京都ラオス人民民主共和国名誉領事館）
株式会社久原本家
東京品川病院
株式会社グリーンエイト オリーブ薬局
東京YMCA国際ホテル専門学校
近江屋株式会社

● お問い合わせ先：フレンズ事務局 friends@fwab.jp

2022年 活動計算書

2022年1月1日～2022年12月31日
特定非営利活動法人　フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN

（単位:円）

科　　目		金　　額
Ⅰ経常収益		128,063,258
1　受取会費		600,000
2　受取寄付金		118,741,274
3　助成金収入		3,499,810
4　事業収益		5,210,155
5　その他収益		12,019
Ⅱ経常費用		148,625,003
1　事業費		141,339,571
人件費		7,316,256
その他経費	支払寄付金	121,799,349
	その他	12,223,966
2　管理費		7,285,432
人件費		2,310,396
その他経費		4,975,036
当期経常増減額		-20,561,745
Ⅲ経常外収益		0
Ⅳ経常外費用		800,000
税引前当期正味財産増減額		-21,361,745
法人税、住民税及び事業税		70,000
当期正味財産増減額		-21,431,745
前期繰越正味財産額		43,622,655
次期繰越正味財産額		22,190,910

東京チャリティ・ガラディナー2022スポンサー

2022年度役員

代　表
赤尾　和美（看護師）

副代表
井津　建郎（写真家）

理事
戴　波留美
高橋　大輔
（三光ソフランホールディングス（株）専務取締役
メディカルホットライン（株）代表取締役
（医）誠光会 ひかりクリニック 理事
（福）誠高会 さくらんぼ保育園 理事）
竹地　春海
（中山身語正宗　参与、大本山瀧光徳寺　寺務長）
中小路　太志
堀　成美（感染症対策コンサルタント）
松島　彰雄（前代表）
渡辺　淳子

監事
熊井　昌広

2022年度正会員

和泉　直子
一乗　朋美
大角　雄三
大田　倫美
大松　誠二
（株）岡興産
小川　直美
小澤　誠
加藤　嘉哉
兼子　思
熊井　昌広
熊井　貴美
（株）熊谷組
小山　達雄
Sisyphus（株）
（医）誠光会 ひかりクリニック
関岡　俊二
（宗）泰宗寺
高橋　俊晴
太刀川　雅子
（株）ナース・ステーション
猶原　祥光
（医）中野こどもクリニック
中山身語正宗 関東別院誓照寺
新見　香
則包　哲
橋本　朋子
平岩　町子
藤井　哲夫
松原　めぐみ
真弓　バラカン
水谷　祐子
メディカルホットライン（株）
（医）めときこどもクリニック
渡邊　信子